

# ことばの雫

## ●呉音の名詞

日本の歴史傳記等にある名詞中には、呉音で讀むのが多い、佛典は悉く呉音讀みであるが年號でも天平、貞觀、天和、貞享と讀むのが故實である、太政大臣とか金剛山とか云ふ類でも、漢音で讀むのよりは語氣が強くてよい又語音の汎意を避けるため、故さらに呉音を用いたのもある、光格天皇の御父君典仁親王の御諡號は「慶行天皇」であるが、「けいかう」と讀んでは「景行天皇」と同じやうに聞こえて紛らわしいので「きやうかう」と讀むことにしたなどは、最近の一事例である

此外書物の題號でも「續日本記」の續はしよくと讀み、「俗耳鼓吹」の鼓はくつと讀み、「説林」の説はぜいと讀み、「萬葉集」「古今集」「今昔物語」「訓蒙圖彙」と讀むの類が多い

《雑誌「此花」第一枝・雅俗文庫、明治四十三年一月一日發行、8頁中段所収》

## ●大阪の心齋橋

東京の両国橋、京都の五條橋と相對して、大阪の心齋橋は著名のものであるが、去月其新築落成して、立派の石橋となつた

これに就て思ひ出したのは、心齋橋といふ名の由來である、貞享三年版の『好色一代女』には「大阪眞齋橋筋呉服町角、書林岡田三郎右衛門版」との奥書があり、又元禄二年版の『本朝櫻陰比事』にも「大阪高麗橋眞齋橋筋南入、雁金屋庄左衛門板行」とあつて、今の「心」が「眞」になつて居るが、その「眞」も眞ではない、「新」が「眞」に變つたのである、と云ふのは、朝鮮即ち韓國が、高麗、新羅、百濟の三韓と云つた往古の頃、心齋橋の所が新羅と百濟の貿易場であつたので、新羅の「新」と百濟の「濟」の字をとつて、「新濟橋」と云つた、其新濟がいつの間にか眞齋となり、更に又心齋と字が變つたのであるとの説だが、心齋橋の所が貿易場であつたと云ふは間違らしい、『浪華上古圖説』に據ると、今の嶋の内を新羅洲と云ひ、船場を百濟洲と云つたとあるから、高麗の館に近い所の橋を高麗橋と云ふ如く、新羅人が居り、百濟人が居つた両洲の間に架た橋であるから、「新濟橋」と云つたのであらう  
此事は今の地誌類に載て居ない新説である

《雑誌「此花」第一枝・雅俗文庫、明治四十三年一月一日發行、14頁上段所収》

## ●珍にあらざる珍

料理法の古版本に、豆腐百珍、蒟蒻百珍、玉子百珍、長芋百珍、海鰻百珍など云ひて百種の調理法を記したるものあり、近頃其類本として「鯛百珍料理」といふを見しに、「珍」の字を左の如く「寶」の略字に誤書せり

本朝古銭の第一たる「和同開珎」を開ちんと音讀する人多しと雖も「同」は「銅」、「珎」は「寶」の略字なりとは成嶋柳北の著「明治新撰泉譜」にも記す所にして「珍」にあらざるなり《雑誌「此花」第一枝・雅俗文庫、明治四十三年一月一日發行、17頁下段所収》



## ●上戸下戸の語原

酒好を上戸と云ひ、酒嫌ひを下戸と云ふことは誰でも知つて居るが、其語原を知らない人は多い、三五園月麿の『酒茶問答』には酒に就て該博らしい考証を多く並べてあるが、上戸下戸の説明はして無い、明和七年の版本、飯袋子の著『赤本智恵鑑』巻の五、飲酒家が大氣焰を吐く條に博物志に王肅張衡馬均の三人伴ひ早朝に霧を冒して遠路に行きけるに一人は酒をのみ一人は飯をくひ一人は空腹なり。空腹の者は悪氣に中りて死し飯をくひたる者は病ひ酒をのみたる者は健なり是酒の悪氣を避ること食よりも勝れる効なりといへり。されば感陽宮の鴈門高きこと空を凌ぎ霧深くして戸を閉る人酒をのみぬ人は濕にあたるゆへ昇ること叶はず依て下の戸を閉る役とし酒をのみ人は上の戸を閉るを役とす故に下戸上戸の名茲に起る云々と記してある、我輩も之を讀んで初めて知つた、尚同條に「酒は百薬の長たるを以て古は病を治するに酒を以てす故に醫者の醫は殿の字に酉の字をかく酉の字は古の酒といふ字なり云々」とあるが、ナルホド酌、酩、醉、醒、醴、釀などは皆「酉」即ち酒に従つて居る《雑誌「此花」第二枝・雅俗文庫、明治四十三年二月一日發行、04頁下段所収》

## ●東鶴西鶴南馬北馬

文化文政の頃、江戸に東西庵南北(朝倉藤八)といふ戯作者があつたが、茲には作者の東鶴と西鶴、浮世繪師の南馬と北馬の事を記す貞享元禄の頃大阪に井原西鶴といふ淫文家のあつた事は誰でも知つて居やうが、東鶴といふ先生のごとは知らない人が多からう、明和七年版の勝川春章筆『繪本舞臺扇』の序に「攝陽西鶴孫東鶴」と署名してある、此外の本では東鶴といふ名を見ない、西鶴の孫東鶴とは、何人かの洒落か偽稱か、はた事実か否かも判らない葛飾北斎の高足に蹄齋北馬といふ名人のあつた事は誰でも知つて居やうが、南馬といふ浮世繪師のあつた事は知らない人が多からう、蹄齋北馬の門人連が踊番附の寄合畫をしてあるのを見ると、雪馬、集馬、南馬、遊馬など署して師の畫風に似た美人畫を描いてある《雑誌「此花」第三枝・雅俗文庫、明治四十三年三月一日發行、17頁下段所収》※文字資料として考察するに、「さいかく」の「かく」は「西鶴」、孫の「とうかく」は「東雀」と表記することを補足しておく。



## ●焼芋屋の起源

甘藷は誰も知つて居るとほり、享保二十年の冬、儒者青木昆陽が幕命によつて江戸に移植し、天下饑餓の際に備へたのが、世上に行はるゝの初であるが、當時は琉球から渡來したといふので、これを琉球芋と呼んで、蒸すか煮るかの外に調理法を知らなかつたのであるところが寛政五年の冬、甘藷が非常な豊作で、捨るやうな價であつたが、貧民すら單調の調理法に厭て買ふ者も少ない處から、本郷四丁目の番太郎が焼芋の工夫をして、八里半と命名て賣出し、俄分限となつたのが其始である、『寶曆現來集』に其起原を述べて芋を焼て賣る事、寛政五年の冬、本郷四丁目の番屋にて、初て八里半といふ行燈を出し、焼芋を賣り初たり、其以前は蒸芋ばかりなり、其後小石川白山前町家にて、十三里といふ行燈を出し候、之も亦焼芋なり、今は町毎に焼芋



ばかりにして蒸芋は少し。

とあるのは確實の説である、八里半の名稱に就ては式亭三馬の『浮世風呂』に

おいか「ヲホ、々、それに又、今年は琉球芋が沢山な所為か、焼芋がはやりますよネエ。おまへさんがたは、御存もございますめへが、いつかたも焼芋のないことはございませぬ△おたこ「さやうございませぬとさ。私も初は何の事を申すかと存たらば、八里半とは九里に近いと申すことだと△おいか「さやうさ、最ちつとで栗だといふ事ださうにございませぬ。おまへさんはどうか存ませぬが、私どもは栗よりおいしうございませぬ△おたこ「さやうでございませぬ。栗は皮をむくだけ世話でございませぬ

婦女の甘藷を賞味するのは、今も昔も變らぬことであるが、九里に近しといふ八里半より九里四里まさる十三里に一變したのは、世の移ると共に、悪狡くなる人心があり／＼と見える心地がする、《雑誌「此花」第一枝・此花社、大正元年十月一日刊 16 頁》

## ●文字繪考

文字繪は、其の名の如く文字……多くは平假名……で人物を畫いたものをいふので、平安朝時代に流行した、葦手繪などの一轉したものであらう、今其の年代を詳らかにすることは出来ないが、黒川道祐作『遠碧軒隨筆』に

青蓮院にへまムシ夜入道の四百年以前のものあり、筆者知れず惜むべし、とあれば、室町時代の初期には、既に文字繪の戯れが行はれてゐたもので、江戸時代となつては、寛永年間作『鷹筑波集』に

入道のもつ小刀やほそからん  
佛師をしてやいくよへまムシ

などゝあつて、盛んに流行つたものと見えるが、是等はたゞ物體を朦朧げに現すに止まつて、繪畫とは云ひ難きものである、これが進歩して立派な繪畫となつたのは、浮世繪師が筆を揮つた以降の事で、文字で其の形を現し顔面手足等を畫き添へたるに初るのであるが、版畫となつたのは奥村政信の『文字繪盡』が最古の一であらう、當時は未だ彩色摺のものはないが、これを續き錦繪にして刊行したのは、左に模刻した葛飾北齋筆の三十六歌仙が、其の濫觴であらう、これは小野小町の像で、其の文字で形體を畫いたものである、《雑誌「此花」第十五號・此花社發行、大正二年十二月一日刊 14 頁下段所収》

※茲に引用する明治・大正時代の雑誌「此花」の由來は、仁徳天皇難波高津宮に王仁參朝、「難波津に咲くやこのはな冬ごもり今ハ春べとさくやこのはな」の哥に見える「このはな【木の花】〔梅の意〕」であるが、何時とはなく「此花」と変容書きされるようになった由、雅俗趣味に用いた文字表記と云えよう。